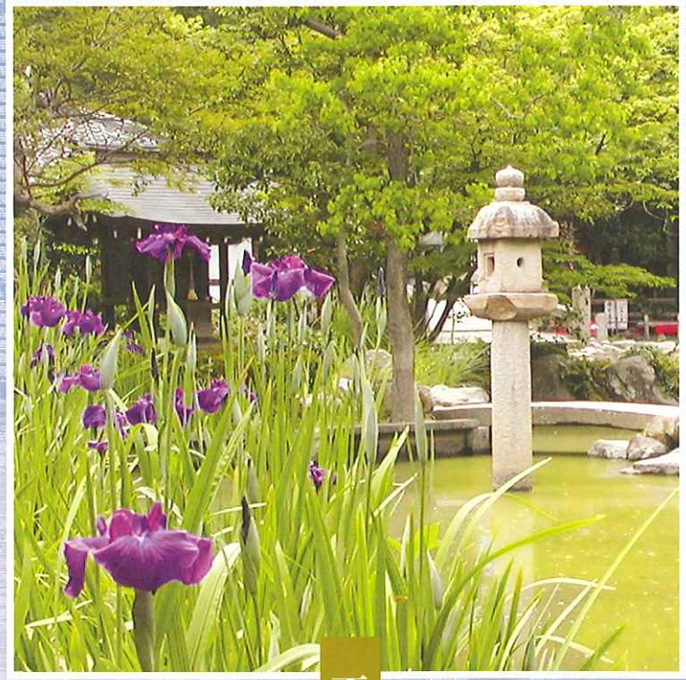
NISHINOMIYA EBISU

西宮 えびす



平成17年 夏号

太々神楽祭、夏祭、船渡御

西宮神社と商店街の歴史

諸国探訪 山形県長井市 總宮神社

えびす NISHINOMIYA EBISU 平成17年 夏号

西宮えびす 平成17年 夏号（通巻第23号） 平成17年6月1日 発行

発行／西宮神社 〒662-0974 兵庫県西宮市社家町1-17 電話0798-33-0321 FAX.0798-33-5355

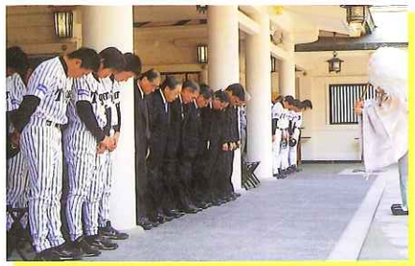
編集／事業課広報 印刷／小西印刷所

EBISU TOPIC えびすトピック

六英堂門復旧

昭和五十二年に六英堂が境内に移築されたと同時に建てられた門も二十七年の歳月を経て傷んでおりましたが、昨年の台風二十二号の被害により倒壊してしまいました。入口が開放状態になり暫くの間仮囲いを施しておりましたが、十日戎が終わって始めた復旧工事も順調に進み、二月二十五日に以前と同じ様式で再建竣工しました。

阪神タイガース必勝祈願



プロ野球セントラルリーグ開幕前に行われる恒例の阪神タイガース必勝祈願が、三月二十九日に球団職員を始め、監督・選手一同参集のもと厳粛のうちに斎行されました。毎年同じ光景ながら、いよいよ始まる野球シーズンに向け春たけなわを肌で感じる恒例行事です。シーズンを大過なく過ごし、ファンの期待に応えられるように頑張ってもらいたいものです。

「御掛鯛」について

えびす様はいつも鯛を脇に抱えておられるお姿に象徴されるように、古来より海を領する神、豊漁をもたらす神として篤く信仰されてきました。江戸期になると初戎には大阪雑喉場問屋より鮮魚が、また夏祭りには西宮の魚屋中より鯛が奉納されるなど、多くの漁業関係からご神前に魚類がお供えされていました。その中でも「御掛鯛」は、文化五年（一八〇八）に兵庫津（神戸）の塩物問屋より奉献があり、その後尼崎問屋に引き継がれ明治になるまで毎年献上が続けられました。吉事の折りに二尾の鯛を結んでご神前に奉納する「御掛鯛」、この吉例に従い、この度広くご崇敬の方々からのご篤志により再興いたしました。正月・十日戎期間中、拝殿西に特設した「御掛鯛舎」に奉献し、奉納下さいました方々の芳名を掲げ、本殿にて御祈願を申し上げ、おしるしをお渡しいたします。詳しくは社務所にお問い合わせ下さい。

「旬祭」参列のご案内

毎月一日・十日・二十日の午前十時から本殿に於いて斎行しています。国家の安泰、皇室の弥栄、氏子崇敬者の繁栄を祈念する祭です。ご参拝の折りにはご自由に拝殿にお入りいただいてご参列下さい。祭典終了後には神職に続いて神饌の御神酒をお受けいただきます。境内の朝の清々しい空気を味わい、えびす様の御神徳を得られますようご参列をお待ちいたしております。

編集室から

末社住吉神社の創建二百年記念事業として崇敬者の皆様から御奉賛をいただきながら進めております境内の整備準備は、工事概要が決定し、去る四月十二日に関係者参列のもと起工式が執り行われました。境内から東に見渡すヨットハーバーや西宮大橋を眺めながらくつろげる憩いの場として親しんでもらえるようにと、樹木を整理して広々とし、ベンチを設置、石畳を敷くなど神社の境内でありながら公園のようなイメージの計画です。七月中旬には完成予定ですので、ご参拝方々お越し下さい。

住吉神社

山形 總宮神社

【鎮座地】山形県長井市横町

總宮神社のご神体 男神坐像（平安時代の作）

みちのく山形四月になってようやく、農作業が始まる。冬の間、山にいた「山の神」が「田の神」になって種蒔き時期に里に下りてくる。「田の神」は、村々の鎮守さまの桜や杉の高い木を依り代としていると信じられ、村々では桜の巨樹などを畏敬し、大切に保護している。西宮神社からいただいた神札「五穀御影」（当地ではオタノカミサマとよんでいる）を各家に頒布するのはこの時期である。五穀豊穣と農作業の安全をねがって神棚にまつり、お祝いし本格的な農作業にはいる。

"秋"米の収穫が終わり、農作業が一段落する頃、「田の神」は「山ノ神」となって山へ戻る。山は心霊の宿る清浄な地で死者の霊が大地に帰りゆく通路で、祖先の鎮魂の庭である。又、人間の生命を維持するのに最も尊い穀物を育てる源泉でもあるので、山の神は穀神でもある。

このころ、西宮御影（オエビッサマ）と大国御影（オダイコクサマ）を頒布する。農家ではこのお札を床の間に飾り、新しい餅や稲一束をそなえ、神様に深く感謝して春までの別れをする。商家では十二月二十日にえびす講の大売出しを行う。えびす大国さまは商売繁盛の神様なのでご馳走をならべ、酒盃を重ねる。一般的な行事としては十二月九日に、各家で「耳明け」を行う。この日は神棚に御恵比寿さまと御大国さまの御影をまつり、二股大根や魚の神饌物をそなえる。いり豆を大枡にいれ「オダイコクサマ、オダイコクサマ耳を大きくあけておりますから、来年は良い事をきかせてください」と大声で三回くりかえし、その都度豆をパラパラまく。二股大根を供えるのは大国さまが女が好きだからだと伝えられている。

總宮神社の風景

總宮神社神官である安部家は江戸時代から西宮社家として神札の頒布に努めてきた。そして、「えびす太夫」とよばれ長く奥州米沢を担当し、その取り扱う範囲は数十カ村におよんでおり、頒布数も多く、その信仰の広さを感じてきた。現在は取扱者が分散したため、以前ほどではないが、従来からの伝統を絶やさないよう努めているところである。

羽州米澤宮村
安部主税
西宮太神宮御神像之
札賦與之神職令免許
處也
公儀御定法并御社法之通
可無相違者免許如件
明和六年丑十月
本社神主従五位下陸奥守神奴連

總宮神社のホームページ　http://sohmiya.org/

門前町としての復興を

えびすさんロード
Ebisu Sun Road

遅くとも室町時代のころには、「えべっさん」を敬う信仰は、全国の大衆の中で生きていたと言われています。「門前市となす」という謂れの如くその戎信仰の総本社である西宮神社の周りには、自然発生的に町ができました。人が集まるところに、商店が集まる理は、現在も過去も同じだと思います。

その町が、現在の西宮中央商店街のルーツであったのは違いありません。

長い歴史を紐といても、さまざまな戦乱などの事件や、環境の変化はあったにしろ、西宮市で一番古い商業集積地として中央商店街地区は生き残ってきました。

逆にいいますと、商売繁盛の神様である西宮神社の門前町だからこそ、戦火という大きなダメージを受けながらも蘇ることができたのかもしれません。

ところが、近年の激しい経済環境の変化と十年前の予想だにしない大震災のダブルパンチを受けました。商店街地区としても、恐らくかつてない苦境かもしれません。

また、さらに震災で傷んだアーケード撤去を余儀なくされ、組合店舗の減少、商店街内におけるマンションの乱立など、現状はますます厳しいものになりつつあります。やはり、こういう時にこそ商店街としての原点に帰るべきです。

中央商店街は、震災で傷んだ道を綺麗な石畳に敷き変えると同時にその愛称を神社の参道としての意味あいがある「えべっさんロード」といたしました。

そして、室町時代ころより、西宮神社に奉仕する芸能集団「傀儡師」（くぐつし）にも着目しました。

傀儡師は、人形を操りながら諸国を行脚し、戎信仰を全国に流布させた宣伝マンでしたが、それと同時に今日の世界遺産でもある人形浄瑠璃「文楽」のルーツでもあるのです。

これは知る人ぞ知る話ですが、地元の市民でさえもあまり知られていません。

せっかくある歴史的財産なのに、極めて残念なことです。

神社など共に「人形芝居のふるさと」としての町づくりの運動をはじめたいと思います。

この町には、西宮神社と共に生きたというすばらしい歴史があるのです。

温故知新こそが、まことの復興へのロードではないでしょうか。

西宮中央商店街振興組合　理事
勝部継弘（染織工房　勝部）

太々神楽祭

神慮を慰めるため、神前に奏舞する神事芸能を神楽と称し、宮廷で行われる「御神楽」と、民間で行われる「里神楽」に大別されます。「太々神楽」とは民間神楽の一般的呼称のひとつで、当社では新緑の爽やかな五月の連休に連日様々な講の太々神楽祭を斎行しており、今年で119回を数える歴史の古い講もあります。

一日「西宮郷醇友会」・二日「八馬家」・三日「大阪第一招福組」・四日「日供講社」・五日「西宮太々講社」・六日「諸国講社」・十日「本えびす講社」と行われる中で、日供講社（えびす大神様のご神前に神饌＝神様への朝夕のお食事＝をお供えし、ご神慮をお慰め申し上げ、感謝の気持ちを捧げる方々の集い）と本えびす講社（えびす大神様を心のよりどころとしてご祈念される方々の集い）は皆様がえびす大神様と深くご縁を結ばれて、一層ご神徳をお受けになられますよう随時入講を受付しておりますので、入講ご希望の方は講務課までお問い合わせ下さい。

夏祭

七月も半ばを過ぎ、いよいよ真っ盛りになろうとする頃、夏祭は厳粛に斎行されます。

午前中は本殿祭、引き続いて「湯立神楽」が行われます。「湯立神楽」とは、熱気払い・無病息災を祈願する神事で、巫女が熱湯の中に潜らせた笹で参拝者にしぶきをふりかけ、熱気・厄災を払います。

夕刻には「えびす萬燈籠点灯式」が斎行されます。境内約三三〇基の石燈籠と約四〇〇〇基の蝋燭に火が次々と灯され、光の列を創ります。日が沈み、薄ら暗くなる中で、浮かび上がる幾千の光は、昼間の熱気ある神事とは好対照で、幻想的な風景で参拝者を楽しませてくれます。

また同日午後七時半からは、「原笙会」によるあでやかな女人舞楽も奉奏されます。同会主宰者の原笙子氏は女性舞楽の復興に力を注がれ、国内だけでなく海外でも活動を広げられています。

参道に吊り並べられた提灯は、家内安全、商売繁昌を祈願する崇敬者から奉納されるものです。奉納ご希望の方は事前にお問い合わせ下さい。

第六十二回 伊勢神宮 式年遷宮 シンボルマーク 標語 募集

二十年に一度の大祭「式年遷宮」は、古例のままに御社殿を新造し、ご神宝をはじめ一切を新しく整えて、ご神体をお遷しする神宮で最も重要なお祭りです。

来る平成二十五年には第六十二回式年遷宮がとりおこなわれます。この大祭への理解と関心を深めていただき「遷宮」を成功させるために

シンボルマークと標語（スローガン）を公募いたします。

一三〇〇年前より連綿と続いてきた古式ゆかしい日本の大祭に、国民の皆様のご協力とご賛同をお願いいたします。

伊勢神宮 式年遷宮広報本部 公式ウェブサイト www.sengu.info/

応募要項

●応募内容

1.シンボルマーク部門

「神宮」をイメージしたシンボルマーク

［ハガキ1枚に収まるサイズでデザインしてください。モノクロ・カラーどちらでも可。］

2.標語部門

「式年遷宮」を成功させるための標語（スローガン）

［字数制限は特にありません。］

●応募規定

●応募資格は問いません。どなたでも応募できます。
●応募作品は、自作未発表作品に限ります。
●応募作品の返却はいたしません。
●応募作品に関する一切の権利は主催者に帰属します。

●応募方法

●ハガキまたは上記ウェブサイトから応募できます。住所、氏名、年齢、職業、性別、電話番号、作品（シンボルマークまたは標語）を明記してください。
●シンボルマーク、標語とも何点でも応募可能ですが、ハガキ1枚またはメール1件につき1作品の応募となります。

●募集期間

平成17年4月1日（金）より平成17年8月15日（月）まで　当日消印有効

●応募先・問合わせ先

〒151-0053　東京都渋谷区代々木1-1-2　神社本庁内
伊勢神宮式年遷宮広報本部「シンボルマーク・標語募集」係
電話:03-3379-8011（代表）　03-3379-8012（直通）　ファックス:03-3379-8299

●表彰

最優秀作品　各部門1点　賞状及び副賞（30万円・旅行ギフト券・記念品）
優秀作品　各部門1点　賞状及び副賞（20万円・旅行ギフト券・記念品）
入選作品　各部門2点　賞状及び副賞（10万円・旅行ギフト券・記念品）

●発表

10月初旬（予定）、入賞者に直接通知、ホームページ、神社新報などで発表。

●特別審査員

葛西敬之（JR東海会長）　平岩弓枝（作家）　安藤忠夫（建築家）
上村淳之（日本画家）　浅野温子（女優）　織作峰子（写真家）

●主催:伊勢神宮式年遷宮広報本部　●協力:神宮司庁・神社本庁・神社新報・伊勢神宮崇敬会　●協賛:JTB・近畿日本ツーリスト・名鉄観光・日本旅行・東急観光・農協観光・帝産観光バス
●後援:日本商工会議所・日本経済団体連合会・東海旅客鉄道（JR東海）・近畿日本鉄道・伊勢市・伊勢商工会議所・伊勢市観光協会

例祭

一年に一度、神社において最も重要なお祭である例祭（九月二十二日斎行）は、二十一日の「宵宮祭」・二十三日の「神輿渡御」と合わせて「西宮まつり」といいます。この期間は祭典だけでなく、各種催し物も奉納され、西宮の町を賑わせます。

二十一日の宵宮祭では、商店街において地車（だんじり）による餅撒きを行います。また境内では、よさこい・和太鼓・ミュージカル・マジックなどなど、各種芸能が奉納されます。

二十二日例祭当日は午前より祭典、昼からは稚児行列、子供樽みこしが執り行われます。

装いも華やかな稚児行列は、幼稚園児数十人参加、「宝船」を引きながら神社～西宮中央商店街周辺を練り歩きます。一方の子供みこしは小学生児童が手作りのみこし約三十基担いで神社周辺を巡行します。いずれも地元の子供たちの奉仕によるもので、子供たちのかわいらしくもりりしい姿に、カメラを向けるご父兄も多数見受けられます。

二十三日にはみこしの陸渡御・船渡御と産宮参りが斎行されます。

なお、三日間通じて、氏子青年会「若戎会」による地車が当社周辺を巡行します。

船渡御

鳴尾の浜の漁師がえびす神の御神像を和田岬の沖で拾い上げたという、御鎮座伝承に由来する祭事「船渡御」は、平成十二年に再興されてから今年で六回目を迎えようとしています。九月二十三日午前、当社を出発した神輿は西宮浜の御旅所まで移動。御旅所祭斎行の後、新西宮ヨットハーバーから船に乗り換えます。御座船や供奉船・童男八乙女船など、色とりどりに装飾された十数隻の船団が西宮浜を周回し、先発の産宮参船は兵庫和田岬へと向かい、そして当社と縁の深い和田神社・三石神社に参拝します。

船渡御と併せて風災の害を鎮める「かざまつり」も斎行されます。船渡御再興の翌十三年に引き続き再興され、今年で五回目になりました。

「かざまつり」については平安時代後期の歌人、源敏頼の手になる『散木歌集（さんぼくかしゅう）』に見えており、同書によれば当時西宮の神は大風を吹かせる神として恐れられていたようです。

現在ほど航海技術の発達している時代であっても、航海中の暴風は命取りです。ましてや平安時代当時においては殊更でありましょう。「かざまつり」の斎行には、風災を鎮めんとする西宮の人々の切なる願いがあったに違いありません。

また今年は初めての試みとして、氏子地区（今年は浜脇地区）の小学児童による童女神楽が御旅所祭にて奉奏されることになりました。一生懸命神明奉仕する子供たちの姿に、必ずや神々の御神慮も和められる事でしょう。

●みこし担ぎ手募集

九月二十三日（秋分の日）には神社の神輿（約一トン）を担いで、西宮中央商店街や西宮浜のヨットハーバー付近を練り歩く「渡御祭」が行われます。神社ではこの神輿の担ぎ手を募集しています。祭に参加して伝統の雰囲気を肌で感じてみて下さい。参加ご希望の方は社務所にお問い合わせ下さい。

えびす瓦版

時の西宮神社社用日誌をひもとく「えびす瓦版」。今号は宝暦十二年（西暦一七六二年）に記された社用日誌です。

神主　吉井和泉守良知（武部）
社家　東向斎宮
〃　祝部　田村伊左衛門
〃　〃　堀江左門
〃　〃　橋本右門
〃　〃　大森善太夫
〃　〃　大森主膳
〃　〃　大森主水
〃　〃　廣瀬右門
〃　神子　紅野治良太夫
〃　〃　大石長太夫
〃　〃　瓶子源兵衛
〃　社役人　辻　佐内

◎大坂表へも社役人を差置く

大坂三郷の内には、従来より正月十日に難波橋や天満橋等で当社札を賦与する人々、また長門、讃岐、伊予、阿波、土佐方面へ神像札を配札に行く人々がおり、これらの長として「組頭」が監督をしていた。ここ数年来は、偽札一件で大坂御奉行所と折衝することも度々となってきたため、このたび正式に「社役人」として久世主水を西御番所へお届することとなった。

乍恐口上之覚

一大坂表ニ社用御座候ニ付久世主水与申社役人□御常地南久宝寺町三丁目布屋弥兵衛方へ為致旅宿差置申候

右御断申上度如此御座候　以上

宝暦十二年午十二月

神主　吉井式部　印

病気ニ付名代

社役人　辻　佐内　印

御奉行所

諸国で当社社役人の届出の初見は次の通りである。

江戸　享保八年（一七二三）永井外記

支配所役人として寺社奉行へ届出

名護屋　元文五年（一七四〇）蓑和田要人

尾張様より支配所申付けがある

京都　寛保元年（一七四一）秋田主計

京都社役人として二条御奉行所へ届出

安芸国へ勧請

安芸国豊田郡大長村の神主越智相模守が当社へ参上し、同国斎島（イツキシマ）の夷社に御神像を奉斎するため、当社からの勧請證文を申請されたので、次の證文を発行した。

芸州豊田郡斎嶋恵美酒之社御神像

従當社勧請之所相違無之者仍如件

寶暦十二年壬午二月

摂州西宮

本社神主　従五位下和泉守神奴連（朱印）

大長村神主　越智相模守殿

斎嶋庄屋　九郎三郎殿

早蕨を御覧

帰途に百太夫御神像を拝見

四月四日、尾崎殿様松平遠江守様が名次山から越木岩にかけての早蕨を御覧のため当地へお越しになられる。越木岩の庄屋よりそのお帰りに百太夫の御神像を御覧になられると案内があった。扉を開けておき、家来を一人つけて置けば神主が来るには及ばないとのことであった。ご拝見になられ五百文をお上げになられる。（百太夫社は西宮社の北半町のところに鎮座）

◎千度祓、大々神楽を執行

大坂大々講元奈良屋茂右衛門、御神酒講元米屋左兵衛両人へ来る十一月十九日と二十日に千度御祓、二十一日に大々御神楽を執行すると案内する。当地の世話人講元へも連絡する。

十九日　神主、社家、祝部中、神子社中へ集会し、御祓の大麻などの支度をして九つ時に御神前へ出て御膳を献上の上十種のご祈祷千度御祓を執行する。次第は次の通り。

羞座（音楽）御膳献上　中臣祓一反
御神楽　御祝詞　十種神宝御祈祷（神主勤之）
中臣祓一反　神楽　撤御膳（音楽）
各退下

二十日も同断　但し御膳は無く御神事のみ

二十一日　中の御殿に榊の山を飾り、神剣神鏡を掛ける。九つ時出勤　次第は次の通り

羞座（音楽）御膳献上　中臣祓（神楽）
撤御膳（音楽）御戸開　御神霊招祷
御鏡餅瓶子献上　提子銚子（従撤御膳是迄音楽続之）
奉幣　祝詞

大々神楽の次第

榊舞　幣舞　連舞　次撤御膳　次奉送神霊
次閉御戸　次中臣祓（神楽）退出（音楽）

各講元、世話人へ御祓大麻、御鏡餅を遣わす

御旅所御神事　延引

五月十四日は恒例の御旅所神事にあたるが、この日に美作国から大坂への囚人が通り、西宮で止宿することとなった。これにより、尼崎からは目付や足軽衆が集まり、当地の役人も夜回りを問断なく行うので御神事を延引されてはと庄屋方より使いがきて、社内で相談の結果十六日に延引して執行すると決まる。

沖の戎社に捨て子

養子の申し出がある

十月六日　沖の戎社（西宮社境外の南に鎮座）の社地に捨て子がいると市庭町の小兵衛が申してきたので、社家斎宮が見分に行くと鳥居の辺りに百日ばかりの男の子が藁の上に置かれていた。早速大庄屋藤十郎などと相談し、隣町の市庭、社家の両町で引き受けることとなった。その後長四郎という者の家で養育していたところ、森村太郎兵衛と申す者が養子としたい旨申出てきたので、社家町の行司惣左衛門より養子に出すこととなった。養い料は無く、祝儀として生鯛一枚他を遣わした。

◎本社開帳、再来年となる

予ねて尼崎の寺社方へ開帳を執り行う件につき内意を伺っていたが、近々朝鮮通信使の通行も予定されており、そうなれば兵庫の津へ御見分の御役人も来られ、何かと差し支えが出てくるので、当初願より遅れて再来年の宝暦十四年に行うこととなった。開帳は享保七年（一七二二）、寛保四年（一七四四）に続いて第三回目となる。

特別な御供え

五月に廣田社で行う御田植の御神事では「佐開」（サビラキ）を神前に御供えする。これは洗米と煎り豆を合わせ、若海布（ワカメ）を添えたもので折敷に盛られる。

神事の後、拝殿にてこの佐開と御神酒を頂戴し、続いて神田で早苗を植える。

六月一日西宮社では氷室の御神事を行い、「氷餅」を供える。

七月七日南宮社の御神事では「点心の供御」と名付け、荷葉（ハスの葉）の上に素麺を盛ってお供えする。

諸国往来

◎三月五日

関東方面で当社神像札を配っている者への切替の免状（年切）百通を江戸表西宮支配所へ送る。先達ての百十通と合わせ合計二百十通となる。

◎三月十五日

社役人の辻佐内は、尾張名護屋の配下触頭である飯田多宮が死去したので、吟味のため尾張へ出向き、二十六日に帰国する。

◎四月十一日

奥州仙台の触頭である村上斎宮組の稲田主膳の倅で軍治と申す者が伊勢参宮に合わせて当社へ参拝。塩釜昆布を土産に持参する。

◎十月二十七日

奥州白川領須賀川の三嶋木靱負が参上。京都吉田家にて受領、その外伝授を受け、当社にても八針勤仕の次第、十種神宝の祈祷式の相伝を願上したので、これを相伝する。